

2017年6月4日（ペンテコステ礼拝）

「知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。」 Iコリント2：4

ペンテコステの時、教会の原点に帰りましょう。パウロはコリント伝道で、十字架につけられたイエス・キリストを、聖霊の力で語ることに専念しました。

コリント教会の分裂騒ぎに対して、彼は「十字架の言葉」を牧師が説教することの大切さを語り、「わたしも…神の秘められた計画（ミステリー）を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした」と、自分も特別ではないと断言します（百年前のミス・フランシスも！）。

「ギリシア人は知恵を探す」（1：22）ことをアテネで経験して（→使徒17章）、彼は「十字架につけられたキリスト」という福音以外のことは、「何も知るまいと心に決めて」伝道したのです。「信徒たちの心の慰めに適切でないもの…については少しの記述もない…」（カルヴァン『ジュネーヴ教会信仰問答』110問）。

コリントでは、「ひどく不安」であって（→使徒18章）元気がなかったのですが（戦後病気になった藤家一六師！）、それだけに「“霊”と力の証明（デモンストレーション）」が伴って、「あなたがたが…神の力によって信」じたのです。

昔も今も、私たちが伝道する時、聖霊なる神が見えない力で人々の心に語りかけてくださいます。そう信じて「立てよいざ立て」（讃380番）と歌いましょう。

2017年6月11日

「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。」 ヨハネ6：9

主イエスはガリラヤ湖（当時は「ティベリアス湖と呼ばれた）の岸に集まった五千人以上の人々を、弱い者、小さい者を用いて養われます（→マルコ6章）。

ヨハネ福音書では、主は特にフィリポ（→1：43以下）に「どこでパンを買えばよいだろうか」と、「試みるため」の質問をされます。彼は「二百デナリ分のパンでは足りないでしょう」と、否定的な答えをします（弱い信仰者！）。

もう一人のアンデレ（→1：40以下）は、少年を見つけて来ます（行動的な信仰者！）が、彼も「こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう」と悲観的です。しかし、小さな物でも、主が「感謝の祈りを唱えて」から配らせられると、「人々が満腹した」ほど食べて、なお「残ったパンの屑で、12の籠がいっぱいに」なるほどでした（聖餐！）。

人々は「イエスのなさったしるし（→2：11）」を見ても、世界に救いと平和を与える神の御子だとは知らず、「世に来らる（モーセのような）預言者である」（→申命記18：15）と誤解し、「王として連れて行こう」と騒ぎ出します。

「キリストはこの人たちに上等の食物を準備したのではない」（カルヴァン）ののですが、貧しいものでも私たちの心を十分に豊かにされます（→讃121番）。

2017年6月18日

「イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。」 ヨハネ6：19

五千人の養いの後、主イエスと弟子たちは引き離される経験をしますが、主はどんな中でも守ってくださる方です。

主を「王にするために連れて行こう」とする群衆を避けて、主は「ひとりでまた山に退かれ」ますが、「弟子たちは湖畔へ下りて…舟に乗り…イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった」ままで出発します（孤独な弟子たち！）。

「強い風が吹いて、湖は荒れ始め…三十スタディオン（約6km）ばかり（湖の真ん中！→マルコ6：47）」流されます。絶体絶命の時、主が近づいて来られても、「彼らは恐れた」のです（→戦地から帰って来た父親を怖がって泣く子）。

しかし、「わたした。恐れることはない」と言われる主の懐かしい声を聞いて、彼らは大喜びします。「彼らはイエスを舟に迎え入れよう」としますが、「間もなく、舟は目指す地（カファルナウム）に着いた」とあります。それまでの苦しい時の長い時間に比べて、幸せな時はとても短く感じられたのに違いありません。

山の上におられた主が「湖の上を歩いて」弟子たちの所に来られたように、私たちが「ここには来てくださるはずがない」と思う所でも大丈夫です。昔も今も「永久（ときわ）変わりなき」（讃497番）主であります（シン普森の歌！）。

2017年6月25日

「わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。」 ヨハネ6：32

主イエスは私たちの心の中まで満たすために来られたまことのパンですが、ユダヤ人たちはそれを理解しません。

彼らは、「主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所」から、わざわざ「イエスを探し求めてカファルナウムに来た」ほどに熱心ですが、主は喜ばれません。「朽ちる食べ物のためではなく…永遠の命に至る食べ物」を求めて欲しいのです（地上のパン！）。

彼らがなすべき「神の業」は、「神がお遣わしになった者（御子）を信じること」です（→宗教改革のモットー「信仰のみ」）。彼らはモーセの時に「荒れ野でマンナを食べた」ような特別の「しるし」を求めますが、主はそれ以上のことをされます（天からのパン！）。

彼らは心を動かされて、「主よ、そのパンを…ください」と求めます（→4：15）。主は、「わたしのもとに来る者…わたしを信じる者は決して渴くことがない」と招かれます（いのちのパン！）。「信仰は…キリストを受入れ…かき抱き…自分の内に住ませようとする」（カルヴァン）のです（「内住のキリスト」！）。

「天からのまことのパン」（→15：5「まことのぶどうの木」）をいただく私たちは幸いです（聖餐の恵み！）。「命の命」（讃353番）なる主を称えます。